

探究とツーリズムの融合による 人財育成の一考察

— 社会で生きる力を育む場面の醸成 —

かん だ だい す け
神田 大介 株式会社 JTB

In the era of VUCA, the qualities and abilities necessary to live are diverse. Recently, “inquiry-based learning” has been attracting attention in the acquisition of these qualities and abilities. This is because there are many opportunities in the inquiry process to develop them. However, inquiry-based learning is not something that can be learned only within schools; much can also be gained by going outside of school. Tourism plays a significant role in this. Moreover, I would like to reveal that these qualities and abilities will be useful in society in the future and will also contribute to the richness of the mind, or well-being. Here, we will go as far as constructing that hypothesis.

キーワード：探究、ウェルビーイング、資質・能力、社会人基礎力、学習指導要領、旅の力

Keyword : Inquiry, Well-being, Qualities and Abilities, Fundamental Skills for Working Adults, Course of Study, The Power of Travel

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

デジタル技術の発達、ボーダレス化により昨今大量の情報に我々は日々触れている。フェイクニュースも氾濫し情報の精査も求められ、また不可逆化と思われたグローバル化も反グローバリズムととれる新たな流れに晒されている。まさにVUCA、予測不能な未来へ自ら解を見出さなければならない時代となっている。そのような環境下、学校教育において「探究学習」¹⁾が注目されている。そのため、学校内でできる教科学習、道徳教育と合わせ学校外での特別活動²⁾もあらためて重要視されている。将来に向け様々な資質、能力、知識を習得するのが学校であるが、そもそも将来とは何か。目先の進学だけでなく、また社会に出ることもまたゴールではない。社会人として自分の価値観に沿って活躍していかなければ生涯を心豊かな状態で過ごすことはできないだろう。OECD（経済協力開発機構）の「Learning Compass2030（学びの羅針盤2030）」³⁾では、個人と社会のウェルビーイング⁴⁾は「私たちが望

む未来（Future We Want）」であり、社会のウェルビーイングが共通の「目的地」とされている。経済先進諸国において、GDPに代表される経済的な豊かさのみならず、精神的な豊かさや健康までを含めて幸福や生きがいを捉える考え方が重視されてきていることの流れと合わせ、文科省も第4期教育振興基本計画⁵⁾に身体的・精神的・社会的に良い状態を、短期的な幸福のみならず、持続的な幸福を含む概念としてウェルビーイングを「目的地」と捉えている。つまり、自身の価値観を知り、将来活躍する姿を自身で描くことが大切であるということである。

こうした将来のキャリアを見据えた探究学習の場は、学校内で見出すのは難しいと考えられる。実際、学校周辺の地域で探究活動を行っている例は多いが、さらに様々な課題設定のできる地域も存在すると考える。そうした地域へ赴き学習することは、地域活性を武器ともするツーリズムと親和性が非常に高いと考える。この論文では、探究の本質をとらえた上で、ツーリズムが親和性の高い素材であることという仮説構築を行っていくも

のとする。

2. 教育の潮流

2-1 国際バカロレア教育

VUCAの時代、その世界の複雑さを理解して、そのことに対処できる生徒を育成する教育プログラムとして、文部科学省も推進する国際バカロレア機構（本邦ジュネーブ）が提供する国際バカロレア⁶⁾（IB：International Baccalaureate）教育をみていきたい。文部科学省IB教育推進コンソーシアムに、以下の通り記載されている。この教育プログラムは、1968年チャレンジに満ちた総合的な教育プログラムとして、世界の複雑さを理解して、そのことに対処できる生徒を育成し、生徒に対し未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせるとともに、国際的に通用する大学入学資格（国際バカロレア資格）を与え、大学進学へのルートを確保することを目的として作られた。現在、認定校に対する共通カリキュラムの作成や、世界共通の国際バカロレア試験、国際バカロレア資格の授与等を実施している。「IBの使命」は

表-1 IBの学習者像

IBの学習者像 (The IB Learner Profile)
探究する人 (Inquirers)
知識のある人 (Knowledgeable)
考える人 (Thinkers)
コミュニケーションができる人 (Communicators)
確信をもつ人 (Principled)
心を開く人 (Open-minded)
思いやりのある人 (Caring)
挑戦する人 (Risk-takers)
バランスのとれた人 (Balanced)
振り返りができる人 (Reflective)

(出所) 文部科学省IB教育推進コンソーシアム

「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやり」に富んだ若者の育成を目的」としている。この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいる。

IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさが有り得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけており、「国際的な視野」をより明確な言葉で定義づける試みと、実践を通じてその理想に近づこうとする努力を、IB認定校の使命の中心として位置づけている。その中で国際バカロレアの学習者像を10項目列記しているが、その筆頭に記載されているのが「探究する人」である。このほか、「知識のある人」、「考える人」、「コミュニケーションができる人」など、探究を行うにあたり必要な学習要素であるとも捉えられるが、いずれにしても「探究」に結びつくものと考えられる。これらを学習する環境を考えると、学校内だけではなく学校外の様々な環境が適しているのではないかと想定できる。

2-2 PISA (Programme for International Student Assessment : ピザ)

PISA (Programme for International Student Assessment : ピザ)⁷⁾ は、義務

教育終了段階の15歳の生徒が、それまでに身に付けてきた知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを測ることのできる、国際的な学習到達度に関する調査である。OECD (経済協力開発機構) は、各国の教育を比較する教育インディケータ事業 (INES) の一環として、概ね3年ごとに実施している。日本も参画しており、結果から教育システムの良い点や課題についての情報を得て国の教育政策や教育実践に生かしている。学習指導要領における、得た知識をどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るかを測る指標として活用できるということである。

調査は3つのリテラシー (数学的リテラシー、読解力、科学的リテラシー) で構成されており、総合的に身に付けた力

を判断できる。2000年代前半では読解力に課題があったが、直近の2022年データでは、総合的に非常に高い得点を得ることができている。教育振興基本計画には日本発・日本社会に根差したウェルビーイングの向上として、日本の社会・文化的背景を踏まえ、我が国においては、自己肯定感や自己実現などの獲得的な要素と、人とのつながりや利他性、社会貢献意識などの協調的な要素とのバランスを取り入れ、日本社会に根差した「調和と協調」に基づくウェルビーイングを教育を通じて向上させていくことが求められると記載がある。これらの高いリテラシーを実践し活用していく場の醸成が必要とされている段階であると考えられる。なお、2025年度は科学的リテラシーを科学的コンピテンシーと置き換え、中

表-2 PISA 数値

PISA2022OECD加盟国における3分野の得点の国際比較						
	数学的リテラシー	平均得点	読解力	平均得点	科学的リテラシー	平均得点
1	日本	536	アイスランド	516	日本	547
2	韓国	527	日本	516	韓国	528
3	エストニア	510	韓国	515	エストニア	526
4	スイス	508	エストニア	511	カナダ	515
5	カナダ	497	カナダ	507	フィンランド	511
6	オランダ	493	アメリカ	504	オーストラリア	507
7	アイスランド	492	ニュージーランド	501	ニュージーランド	504
8	ベルギー	489	オーストラリア	498	アイスランド	504
9	デンマーク	489	イギリス	494	スイス	503
10	イギリス	489	フィンランド	490	スロベニア	500
	OECD平均	472	OECD平均	476	OECD平均	485

(出所) 国立教育政策研究所

表-3 各分野の定義 (2025年)

科学的コンピテンシー
「現象を科学的に説明する」「科学的探究のための計画を構築し、評価し、科学的データと証拠を批判的に解釈する」「意思決定と行動のために科学的情報を調査し、評価し、利用する」能力のこと、また気候変動の時代における持続可能性の問題に取り組む能力を併せ持つこと。
読解力
自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと。
数学的リテラシー
数学的に推論し、現実社会にある様々な文脈において問題を解決するために数学を定式化し、活用し、解釈する個人の能力のこと。

(出所) 国立教育政策研究所

心分野としている。

このように、複雑な社会環境を生き抜き精神的な豊かさを享受できるようになるため、様々なスキルを教育を通して習得することが求められている。かつての教師が一方通行の情報伝達を行い、その内容を暗記するスタイルとは明らかに変化している。次により具体的にそれらのスキルを習得するプロセスや、得たスキルが将来どのように役立つかをみていきたい。

3. 探究とは

3-1 探究学習の概要と将来的な効果

では昨今注目されている探究学習の効果とはどのようなものが考えられるのか、先行研究から見ていく。高校での探究学習が大学進学後の研究活動に与える影響を明らかにした論文を正司(2024)⁸⁾は執筆している。正司(2024)は、複数の探究学習の経験を通して大学進学後の研究活動において挑戦的なアプローチを行っていたことを半構造化インタビューによる質的分析で明らかにした。以下、その論文の記載である。本研究は、高大接続における探究学習の重要性を明らかにし、STEM系人材育成における示唆として「探究学習は技術的スキルの習得にとどまらず、研究者キャリアの形成に重要である」ことを提供した。さらに、実践的な示唆としては、研究活動に入る前に探究学習の振り返り活動を促すワークショップ(WS)の導入が効果的であると考えられる。なぜなら、本研究の結果である、単一ではない複数の探究学習の経験が将来の研究活動において挑戦的なアプローチを促進することを踏まえると、探究学習を複数経験するだけでは【自分ごと化していない研究活動】になる可能性が高く、経験を統合する必要があると考えられるからである、とある。

研究対象は高大接続の観点ではあるが、進学から社会へのアプローチで探究学習が有効である、それも複数経験することでのさらなる効果を生むことが期待されると考えられる。では、具体的に探

究のプロセスをみていながらどのフェーズでどんなスキルが育まれるのかを次にみていきたい。

3-2 探究のプロセスと必要な資質・能力

ここでは探究のプロセスを紐解き、それぞれ必要なスキルを考えてみる。探究活動のプロセスを文部科学省の「探究のプロセスと育成すべき資質・能力の関係」⁹⁾を参考にみていく。最初に課題の設定から始める。仮説を立て、検証方法を考え、計画を立案する。次に情報の収集、目的に応じて手段を選択し情報を収集する。必要な情報を収集し多角的に分析する。次に整理・分析、複雑な問題状況における事実や関係を把握し自分の考えを持つ。そして視点を定めて多様な情報を分析する。課題解決を目指して、事象を比較したり因果関係を推測したりして考える。最後にまとめ・表現では、相手や目的、意図に応じて論理的に表現していく。学習の仕方や進め方を振り返り、学習や生活に生かしていく。このように探究のプロセスにおいては多くの資質・能力が必要となる。あるいは、「探究」を実践することで資質・能力が身に付くということでもあろう。

IBの学習者像を照らし合わせると、知識を得て考える、プロセスにおいてはコミュニケーション能力や心を開く、人への思いやりまで多岐にわたり合致するところが見えてくる。また、PISA 調査項

目においては、特に2025年の中心分野である科学的コンピテンシーの定義を見ると、「現象を科学的に説明する」「科学的探究のための計画を構築し、評価し、科学的データと証拠を批判的に解釈する」「意思決定と行動のために科学的情報を調査し、評価し、利用する」能力、また「気候変動の時代における持続可能性の問題に取り組む能力を併せ持つこと」との記載があり、まさに探究プロセスそのものであることがわかる。身に付けてきた知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどう活用できるかを測る指標として、「探究のプロセス」を重要視している証である。

さらに進路の先にある社会人には、どのような資質が望まれているのか。経済産業省は、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、「社会人基礎力」¹⁰⁾を「人生100年時代」や「第四次産業革命」の下、2006年に提唱している。「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力と12の能力要素から構成されており、これらの能力を発揮するにあたって、自己を認識してリフレクション(振り返り)しながら、目的、学び、統合のバランスを図ることが、自らキャリアを切りひらいていく上で必要と位置づけられている。

必要な能力、能力要素を見てみると、まさに探究のプロセスで育成すべき資質・能力と重なるところが多い。さらに

文部科学省 探究の プロセス	探究プロセス	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	
	育成すべき 資質・能力	主体性、自己理解、内省化、協同性、他者理解、社会参画、社会貢献				
国際バカロレア学習者像	<ul style="list-style-type: none"> ・探究する人 ・知識のある人 ・考える人 ・コミュニケーションができる人 ・信念をもつ人 ・心を開く人 ・思いやりのある人 ・挑戦する人 ・バランスのとれた人 ・振り返りができる人 					
PISA 調査項目	科学的 コンピテンシー	「現象を科学的に説明する」「科学的探究のための計画を構築し、評価し、科学的データと証拠を批判的に解釈する」「意思決定と行動のために科学的情報を調査し、評価し、利用する」能力のこと。また気候変動の時代における持続可能性の問題に取り組む能力を併せ持つこと				
	読解力	自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと				
	数学的 リテラシー	数学的に推論し、現実社会にある様々な文脈において問題を解決するために数学を定式化し、活用し、解釈する個人の能力のこと				

図-1 探究のプロセスと必要な資質・能力等

(出所) 文部科学省・IB教育推進コンソーシアム・国立教育政策研究所

表-4 社会人基礎力

社会人基礎力		
3つの視点	3つの能力	12の能力要素
【目的】同活躍するか	前に踏み出す力	主体性
自己実現や社会貢献に向けて行動する		働きかけ力
		実行力
【統合】どのように学ぶか	チームで働く力	発信力
多様な体験・経験、能力、キャリアを組み合わせて、統合する		傾聴力
		柔軟性
		情況把握力
		規律性
【学び】何を学ぶか	考え抜く力	ストレスコントロール力
学び続けることを学ぶ		課題発見力
		計画力
		創造力
リフレクション（振り返り）		

（出所）経済産業省

言うと、3つの視点は学習指導要領¹¹⁾の何ができるようになるか、何を学ぶか、どのように学ぶかと重なる。

ここまで、探究に必要な資質・能力がどのようなものであるか、それが将来どう必要とされるかを確認してきた。では、学校現場ではどのように探究学習をしているのか、実例をみながら具体的な習得方法をみていきたい。

3-3 学校の探究活動例

高等学校での探究実践例として以下2件紹介したい。1つ目は豊島区にある十文字中学高等学校¹²⁾の事例である。1・2年生の自己発信コースでは、地元の巣鴨駅前商店街を活性化させるためのプロジェクトに取り組んでいる。このプロジェクトは、「チェンジメーカーを育てる」ことを目標とする自己発信コースが、「自分たちの街を自分たちでよくしていく」という理念のもと、地元・巣鴨駅前商店街振興組合とタッグを組み、進めている探究活動である。

まず地元商店街の現況を把握、課題を整理し、実際に現地へリサーチをかけ、SWOT分析を実施、商店街の魅力を再検討し、新たな事業コンセプトを作成、高

校生ならではの視点から生み出されるビジネスアイデアを掛け合わせ、アウトプットを行っていくプログラムとなっている。

次に多摩市にある多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校¹³⁾の事例である。地元多摩市の課題を分類し、それぞれゼミを展開している。ゼミの目的は「必ず行動をする」こととし、議論や発表はそのための通過点となっている。自分の希望するゼミに参加した生徒は、年間通して、ゼミメンバーとともに課題に向き合う。地元自治体である多摩市役所の構想と合致しているため、緊密な協働連携をしている。市役所職員が職員室に常駐、生徒の「探究アドバイザー」として毎週のゼミ活動を支えてくれていることは、特筆すべき点である。活動に悩んだり、アドバイスが欲しい時、すぐそこに地域のプロがいるという環境は、「実行」を目指す生徒にとって大きな力となっている。

ともに探究のプロセスにおいて必要とされる資質・能力を地元の地域と協働しながら育てている。机上での調査から現地の生の情報を人と交流しながら収集しており、学校外での活動が大きな価値を醸成していると言える。テーマでもある

地域活性化は、多くの情報の収集と分析、深い考察を必要としている。テーマ型探究とは異なる課題解決型探究の特徴であろう。学校から外に出て活動することに意義があるが、机上だけの学びではない価値が得られる理由を、次に旅の諸相を通し考察していきたい。

4. 旅の諸相

4-1 予定調和ではない不確実性

探究における情報の収集のフェーズは、目的に応じて臨機応変に適切な手段を選択し、情報を収集することと、必要な情報を広い範囲から迅速かつ効果的に収集し、多角的、实际的に分析すると文部科学省の探究のプロセス（高等学校）に記載されている。つまり、情報収集の場は住んでいる地域、学校以外に広く未知の地へ赴き収集に努めることが求められている。国際バカロレアの学習像にも謳われているコミュニケーション能力が加われば、その情報の範囲、深度はさらに広がるだろう。

未知の地への訪問はある種、旅の一つである。机上で得られた情報から仮説を立て現地へ赴く際、心理的には仮説通りになるであろう、予定調和を期待する。一方、佐々木（2000）¹⁴⁾によると、予定調和ではない探索的な思いも存在している。以下、佐々木（2000）は旅行者行動の心理学として述べている。旅行者が特定の目的地を訪れるのは、一般に、その地域内の特定の場所・施設をある時間的条件のもとで訪問すれば、自分の動機を満たしうる行動をしたり経験を持つことができると思うが、そのような「場所・施設」と「時間的条件」と「行動・経験」の関係が適切に成り立つことをあらかじめ期待している場合だけでなく、「何かあるのでは」というような気持ちで、いわば「探索」的あるいは「偶発」的に訪れることもある。

このように事前に情報収集を行い、場合によっては画像や映像も見ながら一定程度の確度で経験値を想定することができる一方、現地で生活を営む人との交流

や季節、天候などにより、赴かないと得られない経験も存在するであろう。地元地域以外への訪問は、様々な発見があるのでは、と想定される。

4-2 旅の力

日本旅行業協会（JATA）は、旅には5つの力¹⁵⁾があると提唱している。色々な国や地域の歴史、自然、伝統、芸能、景観、生活などについて学び楽しみつつ、それらの発掘・育成・保存・振興に寄与できる「文化の力」、国際あるいは地域間における相互理解、有効の促進を通じ、安全で平和な社会の実現に貢献できる「交流の力」、旅行・観光産業の発展による雇用の拡大、地域や国の振興、貧困の削減、環境の整備・保全など、幅広い貢献ができる「経済の力」、日常からの離脱による新たな刺激や感動、遊・快・楽・癒しなどを通じ、からだやこころの活力を得、再創造へのエネルギーを充たす「健康の力」、旅による自然や人とのふれあいを通じ、異文化への理解、やさしさや思いやり、家族の絆を深めるなど、人間形成の機会を広げる「教育の力」、どれも旅という「コト」を通して生じる力である。旅を通して現地へ赴き得られることは、トリプルボトムライン（環境、社会、経済）¹⁶⁾に関連する事柄、あるいはそれ以上のものがあるだろう。

4-3 探究活動とツーリズムの接点

国土交通省は、「2030年6,000万人・15兆円」という政府目標の達成に向けて、政府一体となった施策や民間・自治体・DMO¹⁷⁾等それぞれ取り組んでいる。しかし、政府目標の高みを目指すために求められる「持続可能な観光地域づくり」「インバウンド地方誘客」等の取組に際し、各分野で様々なボトルネック・課題が存在しており、これらを横断的に洗い出し、整理することが必要であると国も認識している。今までにない経済的な潤い、交流の醸成もあれば、オーバーツーリズムが発生している地域もある。探究学習のプロセスに照らし合わせると、課題の設定において枚挙にいとまがない。これらの点からも探究学習の素材としてのツーリズムは親和性が高いと言える。

5. 今後について

5-1 まとめ

将来のキャリアを見据えた探究学習の場を、学校外、それも地元地域以外で効果的に見出す意義を考察してきた。結果、世界の複雑さを理解し対処できる生徒の育成の場や、身に付けてきた知識や技能を実生活で活用する場として、地域活性を武器ともするツーリズムが効果的であると考える。一方、ここまでは定性的な検証であり、今後、具体的に学校外での特別活動がどのように資質・能力に影響を及ぼすのか、定量的な検証を、実際に

学校の協力も得ながら行っていきたい。

参考文献

¹⁾文部科学省 総合的な学習（探究）の時間 HP
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/main14_a2.htm 閲覧日：2025年10月18日

²⁾文部科学省 学習指導要領 特別活動 HP
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/toku.htm 閲覧日：2025年10月18日

³⁾文部科学省 「Learning Compass2030（学びの羅針盤2030）」HP
https://www.mext.go.jp/content/20230110-mxt_soseisk02-000026911_3.pdf 閲覧日：2025年10月18日

⁴⁾文部科学省 ウェルビーイング HP
https://www.mext.go.jp/content/20230110-mxt_soseisk02-000026911_3.pdf 閲覧日：2025年10月18日

⁵⁾文部科学省 第4期教育振興基本計画【概要】HP
https://www.mext.go.jp/content/20230615-mxt_soseisk02-100000597_02.pdf 閲覧日：2025年10月13日

⁶⁾文部科学省 IB教育推進コンソーシアム HP
<https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/> 閲覧日：2025年10月13日

⁷⁾国立教育政策研究所「OECD生徒の学力到達度調査 PISA」HP
<https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/> 閲覧日：2025年10月13日

⁸⁾正司豪（2024）、「STEM系学部生における中高での探究学習・研究活動が大学進学後の研究活動に与える影響」、日本教育工学会研究報告集 JSET2024-4-A7

⁹⁾文部科学省 探究のプロセスと育成すべき資質・能力の関係 HP
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/064/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/05/23/137

表-5 JATAの提唱する旅の力の効果・効用

「旅の力」の効果・効用
色々な国や地域の歴史、自然、伝統、芸能、景観、生活などについて学び楽しみつつ、それらの発掘・育成・保存・振興に寄与できる【文化の力】
国際あるいは地域間における相互理解、友好の促進を通じ、安全で平和な社会の実現に貢献できる【交流の力】
旅行・観光産業の発展による雇用の拡大、地域や国の振興、貧困の削減、環境の整備・保全など、幅広い貢献ができる【経済の力】
日常からの離脱による新たな刺激や感動、遊・快・楽・癒しなどを通じ、からだやこころの活力を得、再創造へのエネルギーを充たす【健康の力】
旅による自然や人とのふれあいを通じ、異文化への理解、やさしさや思いやり、家族の絆を深めるなど、人間形成の機会を広げる【教育の力】

（出所）一般社団法人日本旅行業協会

0822_4.pdf 閲覧日：2025年10月13日

¹⁰経済産業省 社会人基礎力 HP

<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> 閲覧日：2025年10月15日

¹¹文部科学省 学習指導要領 HP

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm

¹²十文字中学・高等学校 HP

<https://www.js.jumonji-u.ac.jp/education/inquiry/> 閲覧日：2025年10月13日

¹³多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校 HP

<https://www.hijirigaoka.ed.jp/news/entry/001675.html> 閲覧日：2025年10月13日

¹⁴佐々木土師二（2000）、「旅行者行動の心理学」、『関西大学出版社』、p.161

¹⁵日本旅行業協会 旅の力 HP

https://www.jata-net.or.jp/?s=%E6%97%85%E3%81%AE%E5%8A%9B&post_type= 閲覧日：2025年10月13日

¹⁶国土交通省 HP 持続可能な観光政策のあり方に関する調査研究（概要）

https://www.mlit.go.jp/pri/shiryou/press/pdf/shiryou180427_2.pdf 閲覧日：2025年10月13日

¹⁷観光庁 観光地域づくり法人（DMO）とは HP

https://www.mlit.go.jp/kankocho/seisaku_seido/dmo/dmotoha.html 閲覧日：2025年10月18日

【本稿は所定の査読制度による審査を経たものである。】